

---

## 避難所に蔓延する“肺炎”／妊産婦・胎児の力強い生命力

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.140-148)

2013年5月24日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### 「避難所に蔓延する肺炎」

震災時、呼吸器内科ではそれに伴う様々なトラブルがあり、その中でも特に「津波肺」と言われる言葉は広く知れ渡りました。

津波肺とは、津波にのまれた際に、海水や海底に堆積していたヘドロ、津波が途中で巻き込んだ土や瓦礫、船や車の重・軽油、化学物質、病原菌などが肺に侵入することで炎症を巻き起こすことで発症する肺炎で、重症になりやすいのです。ただ溺れて海水を飲み込んだ場合とは違って、油や化学物質を飲んでしまうと肺の受けるダメージは大きく、多種多様な菌に対応する治療や薬剤が必要で、治療期間もそれだけ長期にわたります。

今回の震災では、病院まで辿りつけずになくなった方が多く、津波肺で入院した患者は少数でしたが、肺炎で受診した患者の数は数倍に増加したといえます。

これは、避難所の劣悪な環境も原因の一つではないかと矢内医師は言います。避難所では水が慢性的に不足しているため、歯磨きをしなかったり、口が乾いたりといった原因で口腔内が不衛生となり細菌が増殖し、そこからくる不顕性誤嚥が目立ちました。

また、栄養状態の悪化も免疫力の低下を招き、普段なら軽症ですむような風邪も肺炎を発症しやすくしていました。

この題では、災害時の予防医学の重要性を指摘しているように感じました。津波肺は防ぎ得ない肺炎として存在しますが、劣悪な環境によって起こる肺炎は救援物資の口腔内ケア用品、マスクを十分に配布し使用状況を確認するなどで発症率を減少させることができるのではないかと思います。

### 「妊産婦・胎児の力強い生命力」

津波で腰まで水につかってしまい明らかな低体温症が見られた妊婦が診察室に入っていったというエピソードから始まります。低体温は胎児に悪影響を及ぼし、IUGRなどの良くないアウトカムをきたします。しかし、この妊婦の胎児にエコーや心拍数を計ってみると問題はありませんでした。

震災では、低体温症の妊婦もみられましたが、日が経つにつれて妊娠高血圧症候群の患者が増えていきました。原被災によるストレスや避難所生活で食事情が乱れたことが大きな理由だと考えられました。

避難所では人工乳に必要な消毒薬や水、材料が不足します。今回の震災をきっかけに、母乳哺育の大切さをあらためて実感された妊婦が増えたのではないかと真坂看護師は語っています。